

歴史探訪

日本のアーチ式石橋を訪ねて (3)

～歴史から消えた種山石工、石橋がたどる道～

26期 兼田吉治

前報(その1)では種山石工のルーツを、(その2)では雄亀滝橋や通潤橋を訪ね、石橋の魅力と種山石工の偉業に触れた。本報では、霊台橋や、恋人の聖地と呼ばれている二俣二橋を訪ねて歴史遺産に触れるとともに、種山石工が歴史から忽然と消えた理由や、戦後に石橋がたどった道などを考えてみたいと思う。

霊台橋^{[1][2]}

江戸時代の石造単一アーチ橋としては日本一の大きさを誇る全長 90mの巨大な石橋である。大正、昭和時代の石橋を含めても日本で三番目に大きい。緑川本流の矢部にいたる難所「船津峡」は、交通の要衝で江戸中期より木橋が架けられたが、何度も流失したため、砥用手永惣庄屋・篠原善兵衛が二度と流されることの無い石橋架橋を発案し、自らも出資して、峠原村(そばはらむら：美里町涌井)の伴七(茂見伴右衛門)らが補佐して計画を進めた。種山石工の評判を聞きつけた篠原善兵衛は、石橋架橋を頼むなら**卯助兄弟**しかいないと話を持ち掛けた。話を聞いた卯助兄弟は架ける川幅を聞いて躊躇し、一旦は断ったという。日本一となる橋であるだけに、当時としては不可能と思える大きさであった。しかし、篠原善兵衛が「命に代えてでも責任を持つ」との再三の願いに卯助兄弟は腰を上げたのである。

種山手永の**卯助**を**棟梁**とし、総勢 72 人の石工が各地より集められ、工事は弘化 3 年(1846 年)より弘化 4 年にかけておこなわれた。“林七”の孫である種山石工の卯助、宇一、丈八の 3

兄弟は、秘伝の技術を駆使してこの巨大な橋の架橋に取り組んだ。梅雨と台風が来る季節を避けて造る必要があったため、地元の農民の協力のもと述べ 43,967 人が参加し、わずか 7 ヶ月で完成させた。その業績は橋のたもとの石碑に刻まれ今に伝えられている。しかしあまりの大工事に心労が重なり、卯助は以後二度と石橋を造らなくなったという。図 2 に見られるように、霊台橋の巨大アーチの輪石は緻密に加工・石組みされ、見た目にも美しい。

明治時代以降も、1966 年に上流に鉄橋が架かるまで道路橋として使用された。1967 年に国の重要文化財に指定されている。架橋後 170 年以上が経過した今日でもその威容は健在で、見る者を圧倒する。

地元の農民の協力で予定より早く工事が終わったことが、中国の古典「孟子」の中の文王霊台建造の話に類似すると考えた篠原善兵衛は、この故事にあやかり「霊台橋」と名付けた。霊台とは天文観測のための物見台のことである。江戸時代は地方の総庄屋も博識であった。

二俣二橋

釈迦院川と津留川の合流点に連なって架かるこの橋は文政 12 年(1829 年)種山石工・嘉八によって架けられた。嘉八は前報その(1)で述べた丈八(橋本勘五郎)の父で、種山石工の祖“林七”の長男である。ただし、別の資料では石工不明との説明も見られる。この二橋は、矢部・砥



図 1 霊台橋 (2014 年 11 月 20 日撮影)

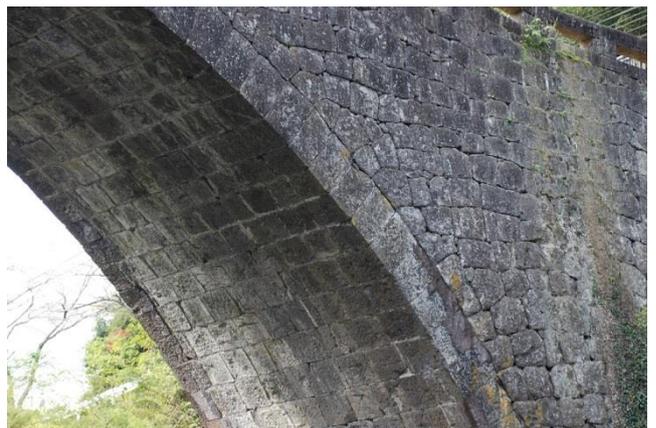


図 2 霊台橋の緻密な石組

用方面と松橋方面及び甲佐方面を結ぶ重要道路が交差する要所にある。この二橋の特徴は二つの川に直角に架けられていることと、橋の長さ・幅・高さが殆ど同じであり、別名「双子橋」とも呼ばれている。図4に二俣二橋の石組を示す。図2に示した霊台橋の石組と比較して、輪石や壁石に荒々しい加工跡が見られる。霊台橋より20年ほど古い技術だからなのか、費用を最少とするためなのか不明だが、今見る我々には風情がある見事なアーチ式石橋と映る。

種山石工が手掛けたアーチ式石橋は住民の寄付等で取り組まれたものも多く、費用節約のためか荒削りの石橋が多いとの報告もある。

事業主の中山手永惣庄屋・**小山喜十郎**は、馬門橋、二俣橋、二俣福良渡の3基の他、三由橋(宇城市)、山崎橋(宇城市)など計7基の石橋を架け、松橋～矢部往還を整備し、手永の発展に尽力したとある[3]。

二俣二橋は秋になると橋のたもとのイチョウが黄金色に色づき、図5に見られるように“橋と影とでハートができる”ことから「恋人の聖地」に認定されており、大勢の方が撮影に来られるそうである。美里町では「恋人の聖地 観光誘客連携による地域活性化事業」に参画されている[3]。

また、2019年放映のNHK大河ドラマ「いだてん」で、主人公の「金栗四三」が少年時代に二俣二橋を背景に河原で川遊びをする口ケが行われ放映された。

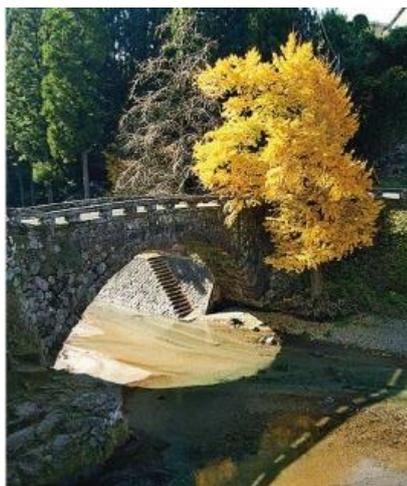


図5 ハートができる石橋



図3 二俣二橋 (2014年11月20日撮影)



図4 二俣二橋の石組

石工の衰退

明治の中頃になると日本にもセメント会社が誕生する。明治14年の浅野セメント(現太平洋セメント)が最初で、明治24年には15社に達している。セメントを使ったコンクリートが煉瓦造りより耐震性が高いことが証明され、その用途は建物から橋へと広がった。日本で最初のコンクリート橋は明治36年(1903年)の鉄骨コンクリートによるものと言われ、明治42年(1909年)には鉄筋コンクリートの橋が架けられた。この頃から鉄筋コンクリートは橋の材料として本格的に使われるようになる。初めのうち鉄筋コンクリートは石の代わりに石造アーチの材料として多く使用された。次第に鉄筋コンクリートの特性が認められると、鉄筋コンクリート製アーチ橋が数多く架けられるようになる。[7][8]

熊本では、明治の後半になってもアーチ式の石橋を作り続けた石工たちに対し、「まだ、金のかかる石橋を造り続けるのか、コンクリートのほうが安上がりなのに！」など、非難の声があったという。このような状況の中でアーチ石橋技術を受け継ぐ石工は次第に消えていった。これは歴史的な背景と近代技術発展の中では自然な流れであった。

1820年頃から日本の歴史に登場し、雄亀滝橋や、通潤橋、霊台橋など有名なアーチ式石橋を架け、また、明治政府の要請により東京で皇居の二重橋や、日本橋、浅草橋などを次々に手掛

けて「肥後の石工」の名声を全国にとどろかせた種山石工を始めとする多くの石工達は、その活躍の場を失い、急速に歴史の表舞台から消えて行ったのである。

石橋の消滅

戦後の高度経済成長期以降、石橋はほとんど架設されなくなった。1972年に「日本列島改造論」を掲げた政権が誕生し“日本列島改造”がブルドーザーの如く押し進められた。道路は拡張され、河川改修が進められ、その際に石橋はその文化的価値が考慮されることなく次々と撤去されていった。そのような中、これを憂う人達により1980年に「日本の石橋を守る会」が結成された。[9]

聖橋：日向往還と呼ばれる旧街道の要所に、天保3年(1832年)石工・岩永三五郎により架けられた長さ35m、幅5m、高さ12mの山都町周辺で最も古い石橋である(図6)。岩永三五郎は有名な石工で、雄亀滝橋を造った後、薩摩藩の要請により鹿児島での架橋に携わったため、熊本で架橋した数少ない橋となっている。

昭和32年下流側の新鉄骨橋架設時、解体が始まった聖橋を、保存を願う住民の声とともに井上誠一氏(初代日本の石橋を守る会会長)が解体を止め、壊される寸前に守られた象徴的な石橋である。平成11年に解体された部分が修復され現在の姿となり保存されている。[1][10]

観光資源としての石橋

美里町や山都町ではアーチ式石橋を町指定文化財として観光に活用し保存されている。

馬門橋：文政10年(1827年)石工・茂吉、勘五郎により架橋。初期の石橋で、両岸が相迫って絶壁をなし、周辺には樹木が茂り、溪間には清流が流れるなど、絶景の中に佇む石橋である。

大窪橋：嘉永2年(1849年)総庄屋・篠原善兵衛、石工・(岩尾野)新助により架橋された。橋長19.3m、橋幅2.9m、田園風景の中にあり春には菜の花や桜と調和した小さな石橋である。

石橋を通じて石工達の技術と工夫の結晶を訪ねた。民の声を聴き、生活の向上を目指して動いた総庄屋の方々や、石橋架橋技術で応えた石工達。素晴らしい歴史を教訓にしたいものです。

参考資料

- [1] Wikipedia：霊台橋、肥後の石工、種山石工、聖橋、他
- [2] 太田清六：石造眼鏡橋「霊台橋」の考察；日本建築学会論文報告集 第71号・昭和37年4月
- [3] 美里町 HP：[観光・特産]>[石橋案内]> 二俣二橋、恋人の聖地 観光誘客連携による地域活性化事業
- [5] 山都町 HP：観光ナビ>歴史文化・石橋>聖橋
- [6] あじこじ九州 HP：[熊本県]>[上益城郡]>霊台橋
- [7] 台信富寿：認定化学遺産第017号「我が国セメント産業の発祥とその遺産」；化学と工業 Vol.65-7 July 2012
- [8] 鹿島建設 HP：スペシャルコンテンツ>建設博物誌>橋>橋の歴史物語
- [9] 日本の石橋を守る会 HP
- [10] 株式会社尾上建設 HP：石橋/工事实績/熊本県/聖橋



図6 聖橋（見える橋脚はすぐ横の鉄骨橋）



図7 清流の中にたたずむ馬門橋



図8 風景に調和した大窪橋